

平成から令和へと元号が変わり、気が付けば九月も最終週を迎えます。

ところで、元号の「元」という字は、人の上に頭が乗った姿を現す漢字であると言われてい  
ます。この字は、頭を強調することから、先頭という意味で、「はじめ」と読まれます。そし  
て、頭を強調する横の二本棒のうち、上の一本を取り除くと、「兀<sup>こつ</sup>」という文字になります。「兀」  
は、文字の成り立ちから、頭が突き出る様子を表すと解釈され、高くそびえるの意味に捉えま  
す。また、文字の姿から、高い山の上に見渡す限り平地が広がっていると解釈される文字です。  
「兀」が二つ並べば、いわゆる「コツコツ」となり、毎日の行いを積み重ね地道に何事かに励  
む様子を表す言葉となります。

この「兀兀<sup>こつこつ</sup>」という言葉。道元禅師の著書『普勸坐禅儀<sup>ふかんざぜんぎ</sup>』の中では、同じ文字でも  
「兀兀（ごつごつ）」と読み、坐禅の姿勢が少しも動かない姿を表しています。坐禅堂におい  
て、姿勢を正し各々が目の前の壁に向かい、身じろぎもせず、ひたすらに坐禅を組む後姿は、  
まさにそびえたつ岩山のように見えます。そして坐禅を組む姿勢だけではなく、頭の中では、  
その字の通り、平ら<sup>たい</sup>にあって、揺れ動く枝葉すら持たない心の在り方を表しているとも言えま  
す。

しかしながら、坐禅を組む中で、姿勢も頭の中においても「兀兀（ごつごつ）」とした姿で  
あり続けることは容易ではありません。身体や心の在り方を注視し、少しも動かないはずの山  
が不本意に動き出す時には、その都度ただす努力をして、座り続けるのです。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

私たちの生活にある「兀兀<sup>こつこつ</sup>」という言葉も、一つの姿を目指し、いつまで続くかもわからない長い道のりを一歩ずつ歩んでゆく姿を現していることに、親しみを感ずります。

道元禅師の時代に使われたこの言葉は、今日もなお実に「兀兀（ごつごつ）」と、そして「兀兀（こつこつ）」と引き継がれているのです。

— 終 —